恋に落ちたら

ゲキガンガー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋に落ちたら

【Ｎコード】
Ｎ８９１５Ｚ

【作者名】
ゲキガンガー

【あらすじ】
男性恐怖症の萩原雪歩に、恋愛ドラマのヒロイン役が回ってきた。しかし、このままでは無事にドラマの収録を終える事はできない。その男性恐怖症を治す為に、プロデューサーは雪歩とデートをする事になるのだが、事態はよからぬ方向に――。

恋に落ちたら前編（前書き）

なんていうか、前回の反省を踏まえて、原作調で。とはいえ、アニメ位しかまともにアイマス知らないのですが。
お楽しみ頂ければ幸いです。

恋に落ちたら前編

アイマスss『恋に落ちたら』　作ゲキガンガー

プロローグ。

恋に落ちたら、私もまた変われるのでしょうか。そんな事を最近、萩原雪歩はよく考えます。

「3、2、1」

カメラマンさんのカウントダウンが始まる。撮影場所は公園だった。全力疾走してきた私は、思い切り息を切らしている。

「はぁ……はぁ……」

「待てよ」

後ろから、追いかけていた男の人が、そう呼び止められる。

「お前俺の事嫌いなのかよ？」

「そうじゃない……そうじゃないけど」

「だったら何で逃げるんだよ」

あっ。

男の人の手が触れる。

我慢しなきゃなのに、体が、全身が震える。

顎に手を当てられる。実際に涙を流しているのは、演技でも何でもなく、怖くて涙があふれてきたのだ。ふぇーん、怖いよぉ～。

けど、男の人の顔が近づいてくる。

「俺は、こんなにお前の事が好きなのに――」

顎に手を当てられた。気持ち悪い汗が浮かんでくる。我慢しなきゃなのに。

唇が触れる位、男の人の顔が近づいてきた。

ぷつん。

私の中の何かが切れた。

「き、きゃあああああああああああああああああああああああああああああ！」
バチーン！
私は、思い切りのビンタを放っていた。
９６１プロダクション事務所。高いビルのワンフロア自体が、９６１プロの事務所となっている。そこで、新聞を広げて読んでいる男がひとり。
『萩原雪歩、恋愛ドラマのヒロインに抜擢！』
芸能新聞の一面には、そうででかでかと書かれていた。
「くだらん！　実にくだらん！　高々弱小プロの分際で！」
９６１プロの社長、黒井社長は、新聞を読みつつ、そう言った。
「全く、何と目障りな事だ！　７６５プロ！」
面白くなさそうに新聞を読み続ける。
「ん？」
『なお、調べによると萩原雪歩氏は、男性恐怖症を患っており、撮影は難航すると見られており、』
「ふふふ……待てよ。これはなかなか面白いネタじゃないか」
新聞を閉じ、テーブルに置く。
「見ていろよ７６５プロ！　目に物を見せてやろうじゃないか！
はははは、ふっはっはっは！」
黒井社長は、窓から風景を見下ろしつつ、哄笑していた。
「……というわけで、撮影は中止。雪歩は落ち込んじゃってるみたいで」
律子さんから俺は、話を聞いた。
「そうなんですか」
「さっきからそこで落ち込みっぱなしで」
律子さんは溜息を吐く。
雪歩は事務所の椅子に座り、同じように溜息をついて落ち込んで

いた。仕事のミスを嘆いているんだろう。
「どうして、私なんかが恋愛ドラマのヒロインに選ばれたんでしょうか。私なんかが選ばれるよりも、別の方が――」
「そう落ち込むな雪歩」
「プロデューサー」
「お前は、ドラマの監督の目に止まったんだ。何でも、ヒロインのイメージに雪歩がぴったりだったらしくて。普通はオーディションで決まるような役を、オファーで得たんだ」
「けど、そんな私のせいでドラマの撮影が中止になって、撮影が送れて、他のスタッフにも大変な迷惑をかけて。本当、今すぐにでも穴を掘って埋まりたい気分です」
「……頼むから、事務所に穴を掘るのはやめてくれよな」
「……はい」
それでも雪歩は落ち込んでいる様子だった。故郷村でのライブから、少しは男性恐怖症がマシになったようだが、それでも、恋愛ドラマのヒロインとなると勝手が違ったようだ。
「――けど、私、自信がありません。その私は、男の人が……その、怖いんです。プロデューサー、今回のドラマの件、今から御断りはできませんか？」
「できるわけないだろう、一度引き受けた仕事を。プロだったら、一度引き受けた仕事を投げ出すなんて持っての他だ」
「そうですよね」
「何とか、その恐怖症を無くす方向で考えてみよう。俺も最善をつくす」
「はい！」
「頑張ろうな雪歩」
俺は雪歩の手を握った。数秒固まる。
「……き、きゃあああああ！」
悲鳴と共に、痛烈なビンタが放たれた。

「男性恐怖症ですか……」
「うーん。それを治すとなると、ちょっと難しいですね」
俺は律子さんと音無さん、二人に相談をした。二人もまた、頭を悩ませる。
「僕も、その事で必死なんですよ。雪歩は、その弱点さえなくなれば、きっとトップアイドルに駆け上がれる。その素質があると信じています」
「そうですねぇー」
音無さんはしばらく考えた事、
「やっぱり、男の人に慣れさせるのが第一なんじゃないでしょうか？」
「男の人に慣れさせる？　具体的に、どうすれば」
「……デートでもすればいいんじゃないでしょうか？」
音無さんは続ける。
「一日デートをして、雪歩ちゃんを男性に慣れさせるんです。そうすれば、少しはあの恐怖症も治るんじゃないでしょうか？」
「荒療治ですね……」
律子さんはそう言っていた。
「幸い、今回の撮影中止で雪歩には比較的時間の余裕があります。落ち込んでいる雪歩を励ます目的で、やってみるのには賛成です」
と、律子さん。
「けど、それを誰がやるんですか？」
「この事務所で男性で――」
「しかも雪歩ちゃんが心を開いていて――」
二人の目が俺に来る。
「わかりました……俺がやります」
７６５プロには男性は二人しかいない。まさか、社長に任せるわけにもいかない。
「……その、雪歩、俺とデートをしないか？」

「でっ、でっ、デートですか？　私がプロデューサーと？」
随分と動揺した様子だった。
「べ、別に変な意味じゃない。雪歩の男性恐怖症を治すにはどうすればいいのか、律子さんと音無さんと話あって考えたんだ。ほら、雪歩の恐怖症は、大分軽減されてはきているだろう。前は俺を見るだけでも悲鳴をあげていたのに……」
「はい……それはもう、慣れましたから」
「だったら、これからもっとマシになって、ドラマのヒロインも無事に演じる事ができるようになるかもしれない。だから、もっと慣れる為に、俺と一日デートしてみないか？」
「それで、その、でっ、デートですか」
雪歩は緊張した様子だった
「俺じゃ力不足かもしれないけど、とにかく、少しでも男に慣れておかないと、今回の撮影を乗り切れない」
「そうですね。その通りです」
「今度の日曜日、俺も休みで、雪歩も仕事は特に入っていなかったはずだ。だから、その時に俺とデートしよう。いいな、雪歩」
「はい！　わかりました。プロデューサー」

しかし困ったものだ。俺は、大学を卒業してこのプロダクションに入るまで、碌な恋愛経験がないのだ。デートなんて、記憶にある限りした事がない。
弱ったぞ。
どうやって雪歩をエスコートしてやればいいのか、全く見当もつかない。
「プロデューサーさん！」
元気に声をかけてきたのは、春香だった。
「どうしたんですか？　随分落ち込んでいるみたいですけど」
「それが――」
春香に聞いてみるのも一興かもしれない。

「あのさ、春香」
「はい」
「春香はデートに行くならどういったところに行ってみたい？」
「え？　で、で、デートですか？」
何だか慌てた様子で訊き返してくる。持っていた湯呑茶碗を落としそうになる。
「ああ。デートだ。行くとしたら、どんなところに行ってみたい？」
「……そ、そうですね……。子供っぽいと思うかもしれないけど、遊園地とか」
「遊園地？」
「それで、メリーゴーランドに乗って、二人で観覧車乗って、夜はイルミネーションを見るとか、もう、最高ですね。そんなところに、好きな人と行けたら最高ですね」
遊園地……か。俺は手帳にメモをしていた。
「わかった。遊園地だな。考えておくよ」
「そのデート、いつ行くんですか？」
「ああ、今週の日曜日だ」
「今週の日曜日……わかりました。スケジュール調整しておきます」
「ん？　春香、どうかしたか？」
「な、何でもありません。期待してますね」
なぜか、春香は微笑んだ。
「場所はどこなんですか？」
「場所は、765プロの下の、食堂。時間は、12時集合だ」

「プロデューサー」
「……千早か」
次に会ったのは、千早だった。
「どうしたんですか？　随分と深刻そうな顔をされてますが」
せっかくなので、千早にも聞いてみるか。そう俺は思い至った。
「……実は、デートについて悩んでいる事があって」

「デート？」
千早は目を丸くする。そんなに驚く事だろうか。
「ああ。千早はどこか行ってみたいところとかあるか？　どこでもいい」
「……そうですね。プロデューサーがそうおっしゃるなら。今度コンサートがあるオペラ歌手の公演に行ってみたいですね。歌の勉強にもなりそうです」
「……なるほど、千早らしいな」
「おかしいですか？」
「いや、千早らしくてとってもいいと思うよ。真面目で誠実だ。歌に対しては特に」
「……そうですか」
「ありがとう。参考にするよ」
「参考？」
千早は首を傾げていた。
「それで、そのデートはいつ行くつもりなんですか？」
「ああ。今週の日曜日だ」
「今週の日曜日ですね……」

「場所はどこなんですか？」
「ああ……この事務所の近くの――」
千早はなぜかスケジュール帳を広げていた。

「ねぇねぇ、ハニー何だか深刻そうな顔をしてるの」
「美希」
次に会ったのは、美希だった。
「美希に相談すれば、きっと心がスーッと楽になるの」
そうだな。美希にも相談するか。
「実はデートについて悩んでいるんだ」
「え？　デートなの？」

美希は、目を大きく見開かせた。
「ああ」
「……美希はその、別に、ハニーと行ければ、どこでもそれだけで満足なの」
「……そうか？」
「ショッピングでも、映画館でも！　どこでもいいの！　ハニーの行きたいところが、美希の行きたいところなの」
「何でもいいと」
俺は手帳にそうメモをした。メモする意味は見いだせなかった。
「うん！　そうなの！」
「わかった。考えとくよ」
「わかったの！」
美希はなぜか笑顔だった。
「それで、ハニーデートはいつ行くつもりなの？」
「ああ、それが今週の日曜日で――場所は」
「わかったの。美希、とっても楽しみにしてるの」
なぜか、美希は笑顔だった。

「待て！　犬美！　ハム蔵！　勝手にそっちに行くなーー！」
「響」
次に会ったのは響だった。家族（ペットというのは相応しくない）の動物を追いかけている。
「ん？　どうしたんだプロデューサー。何だか浮かない顔をしているぞ」
俺の顔を見るなり、響はそう言っていた。
「実は、デートについて悩んでいる事があって」
「ん？　デート？」
そうだ。響にも聞いておこう。
「響はどこか行きたいところとかあるか？」
「デート？　……だったら響は、動物園に行きたいぞ！」

「動物園？」
「うん。動物達がいっぱいいて、とっても楽しいんだぞ！」
「動物園か、わかった」
俺はメモをする。
「それで、いつ行くんだ？」
「ああ、今週の日曜日に……場所は――」
「わかった。なんくるなないさー」
響は、なぜか笑顔でそう言った。

事務所で真は、少女漫画雑誌を読んでいた。
「なぁ、真」
せっかくなので、真にも聞いてみよう。
「何ですか？　プロデューサー」
漫画雑誌から俺に目を移す真。
「ちょっと、聞いてみたい事があるんだけど」
「はい」
「真は、デートするなら、どんなところいってみたい？」
「で、デートですか？」
いきなり動揺したような表情になる真。
「ああ。どんなところでもいい？」
「僕はですね。行ってみたいところというより、憧れみたいなものはあります。それは、その、フリフリのドレス着て、女の子らしく扱われたいです。それで、王子様と、シンデレラみたいな一夜を――それが、僕のデートの理想です」
「なるほど……参考にするよ」
「……デート、いつ行くんですか？　プロデューサー」
「ん？　ああ。今週の日曜日だ」
「こ、今週の日曜日ですね！　わかりました！」
真はなぜか目を輝かせていた。

「あっ、プロデューサー！　どうしたんですか？」
事務所の調理場あたりにいたやよいは、俺に向かってそう聞いてきた。
「やよいか」
「なんだか深刻そうな顔していますぅ」
そうだ。やよいにも聞いておこう。
「どうしたんですかプロデューサー？」
「やよいは、デートするなら、どんなところに行きたい？」
「でで、デートですか？」
「ああ」
「その、デパートの試食品めぐりとか、本屋さんで雑誌を立ち読みとか、あんまりお金のかからないところに行きたいですぅ」
「映画館とか、遊園地はだめなのか？」
「そんなお金のかかるところ、人生で数える程しか行ってないです」
「そうか……参考にするよ」
俺はメモをする。
「それで、いつ行くんですか？」
「ああ。それが、今週の日曜日で――場所は――」
「はい。わかりました。弟達の面倒は、長男に言っときますぅ」
やよいは笑顔で微笑んだ。

「どうしたんですか？　プロデューサーさん」
次に会ったのはあずささんだった。
「あずささん……」
「何だか、深刻そうな顔をされてますが。私でよかったら、相談に乗りますよ」
「実は、デートについて悩んでいまして」
「はい？　デートですか？」
目を丸くするあずささん。
「はい。あずささんは、デートするならどんなところに行きたいで

すか？」
「そうですねぇ……」
あずささんは頭を悩ませた後。
「私なら、占いに行きたいですねぇ」
「占い？」
「ほら、私って占いが好きなんで。占いの館とかで、好きな人と運命を占う、なんて、ロマンチックな状況に憧れます」
「……なるほど」
俺はメモをした。
「それで、いつ行くんですか？」
「え？　はい。今週の日曜日に」
「……はい。わかりました。期待しておきますね」
あずささんは微笑んでいた。
「うーん」
まだ頭を悩ませている間の事だった。
「なに不景気な顔してるのよ？」
次に会ったのは伊織だった。
「伊織か」
「ふん！　プロデューサーがそんな不景気な顔してちゃ、事務所に仕事が入ってくるわけがないじゃない！」
顔をツンと、顔を背けさせる。
「……はは、そうだな、すまん」
「何か悩みでもあるわけ？」
「まあ、悩みと言えば悩みなんだが――、なあ、伊織」
「なによ？」
「お前はデートに行くならどんな所に行ってみたい？」
「デ、デートですって？」
「ん？　どうしたんだ？」
伊織はなぜか頬を赤くしていた。
「あ、あんたがそんな事言いだすなんて、どういった心境の変化よ」

「何かおかしいか？」
「……別に」
「それで伊織は、デートするならどういうところに行ってみたい？」
「高級レストラン、高級ホテルのてっぺんの夜景の見えるところで、ワインを飲みながら、その日を過ごすの。なんてゴージャスセレブかしら。ふふっ」
ワインって、お前まだ未成年だろう。
「なるほど、高級レストランに、夜景ね」
俺はそれをメモする。
「それで、そのデートっていつ行くのよ？」
「ああ、今度の日曜日だ」
「日曜ね。わかったわ」
伊織はなぜか微笑んでいた。

「どうかしたのですか？　プロデューサー」
次に会ったのは貴音だった。
「随分と顔色が優れませんが……何か悩み事でも？」
「はは……さっきからずっとそう声をかけられてるんだけど、俺ってそんなに表情に出るようなタイプなのかな？」
「はい。そうなのでしょう」
「……実は今度デートをしようと思っているんだが――」
「はい。それで私に？」
「ああ……貴音はどこか行ってみたいところとかあるか？」
「そのような質問にはお答えできません」
「……そうか」
「ですが、私はラーメンは嫌いではありません。ラーメン屋なら、差ほど機嫌を損ねる事はないでしょう」
なるほど、ラーメン屋か。
……って、しっかり答えてるじゃないか。
俺はメモをする。

「わかった。参考にするよ」
「それで、そのデートはいつ頃行く予定なのですか？」
「ああっ、今度の日曜日だ」
「日曜日ですね。わかりました」
貴音はなぜか微笑んだ。

「ねぇーねぇー兄ちゃん」
「真美と亜美と遊ぼうよー」
次に会ったのは、亜美と真美だった。
というより、後ろから抱きつかれたのだが。
「こら、亜美と真美――今俺は忙しいんだ」
「忙しいってどういう事さ兄ちゃん。さっきからうんうん唸っているだけじゃないか」
「そんな事する位なら、亜美と真美とゲームして遊ぼうよー」
前者は亜美、後者は真美の言だった。
……俺だってそうしたいのはやまやまなんだが、今はデートの事で頭が一杯なんだ。
ともかく、こうして会ったのだから、二人にも聞いておこう。
「なあ、亜美、真美」
『なに兄ちゃん？』
二人は言葉を揃える。
「お前達は、デートするなら、どこがいい？」
『デート？　兄ちゃんと？』
二人は言葉を揃える。
『亜美と真美は、ゲームセンターに行きたい』
「ゲームセンター？　そんなところでいいのか？」
「うん。それも最新鋭のゲーム機が置いてある、最新のゲームセンターで、ずっとゲームをするんだ！」
と、亜美。
「ねぇねぇ、兄ちゃん、つれてってよー」

と、真美。
「そうすれば亜美と真美、兄ちゃんのほっぺにちゅーくらいしてあげてもいいんだよ」
と、亜美と真美。
「あんまり大人をからかうな」
『それで、そのデートっていうのはいつ行くの、兄ちゃん？』
「ああ……今週の日曜日だ――場所は」
『今週の日曜だね。わかったよ、兄ちゃん』
なぜか、二人は口を揃えていた。

――そうして、本番のデートの日がやってきた。

≪後編に続く≫

恋に落ちたら後編

『恋に落ちたら、後編』　作ゲキガンガー

「どうしたの？　春香？　そんなにはしゃいじゃって」
朝の着替えの事だった。お母さんにそんな事を言われる。
「だってーなかなか決まらないんだもん」
私は着る服を悩みつつも、おおはしゃぎだった。どれがいいかな。スカートの色は。柄はどれがいいか。やっぱり赤か、それともチェックか。どれが似合うか。そんな事を考え、鏡の前に立っているだけで、時間があっという間に――って、あっという間。
「行けない！　もうこんな時間！」
私は慌てて、家を飛び出した。そして、約束した場所へと急ぐ。

「……春香」
そこにいたのは、なんと、千早ちゃんだった。
「おっはよー、千早ちゃん。偶然だね。千早ちゃん」
「春香こそ……」
「あれ、なんだか、今日の千早ちゃん色っぽいよね」
「そう？」
「うんうん。なんていうか、いつもと違うっていうか」
千早ちゃんは、いつもよりもお化粧をしてたし、なんだか大人っぽかった。普段はもっとメイクも薄くて、服装だって、身なりを整えるだけで、おしゃれとか、そういうのとは違うのに、今日はなんだか、その、なんていうか、気合が入ってるっていうか。
「春香こそ、なんだかいつもと違う」
「そっかなー」
私は照れて頭を抑える。
「あっ、二人とも、偶然なのー。どうしたの、こんなところで」

次に来たのは美希だった。美希はいつもおしゃれだけど、今日はいつも以上におしゃれな格好をしていた。
「美希こそどうしたの。何か気合入ってるけど」
「うん。今日は美希にとって、特別な日なの」
美希は微笑んでいた。
「あっ、マコト君とデコちゃんなの！」
「誰がデコちゃんよ！　誰が！」
二人は言い争いをしながらこっちに向かってきた。
「……真君」
私は思わず苦笑してしまった。
「あっ！　変ですか！　やっぱり変なんですね！　僕だって、女の子なんですよ！」
真君は、フリフリのドレスを着ていた。ただ、似合ってない。王子様がお姫様の格好をしているようだ。
「さっきから、真に似合ってないって教えてあげてたのよ」
そう、伊織ちゃん。
「そういうデコちゃんも、ゴージャス過ぎて逆に浮いているの」と、美希。
「うるさいわね！　こっちの勝手じゃない」
伊織ちゃんは、いつもゴージャスな格好だけど、今日は王宮貴族みたいな、ともかく、ゴージャス過ぎるくらいゴージャスな格好だった。ダイヤとか散らばってるし。
「皆さん、なんだか気合はいってますぅ」
そして、次に来たのはやよいちゃんだった。
「やよいは、なんだかいつも通り、貧乏っぽい格好ね」
そういったのは伊織ちゃんだ。
「ひどいですぅ！　今日のはお母さんに借りてきた、うちで一番高い服なんですよ。特別な日しか着ない服を、お母さんに頼み込んで借りてきたんですぅ！」
「それで……なんだかぶかぶかなんだね」

やよいちゃんのドレスは、手足が少し足りてなかった。
「皆、どうしたんだ？」
次に現れたのは、響ちゃんだった。
「響ちゃん……って、今日はいぬ美ちゃんとハム蔵ちゃんはいないんだね」
「ああ。二人とは、長い説得を経て、今日一日は家でおとなしくしてもらうことにしたんだ。今日は特別な日だからな」
響ちゃんも、気合の入った格好だった。いつものようなワイドルさより、女の子らしさが目立つ。
「あらあら皆さん、偶然ですね」
次に出てきたのは、あずささんだ。
「皆、なにやら随分と気合が入っている様子」
そして、次にきたのは四条さん。
二人とも、皆と同じく、気合の入った格好。
「なにやら、皆これからデートって感じの格好だね」
そういって現れたのは亜美。
「いやー、皆さん実に気合が入ってますなー」
真美も姿を現す。そういう二人も、結構おしゃれをしてきた感じだ。
「……どうやら、雪歩以外は765プロのアイドル全員がそろった形ですね。偶然にしてはできすぎています」
と、四条さん。
「ちなみに、皆さん、どういう予定でここに来たのですか？」
あずささんは聞いてきた。
『それは――』
皆が――一斉に。
「デートです！」（私）
「……デートです」（千早ちゃん）
「それが、実はデートなんですぅ！」（やよい）
「それがなんと、デートなんですよ！」（真）

「美希はデートなの！」（美希）
「……それは、デートに決まってるじゃない！」（伊織）
「デートさ！」（響）
「亜美と真美は――」
「なんとデートなんだよ！」（亜美と真美）
「ちなみに、私はデートです」（四条さん）
それを聞いたあずささんは。
「あらあら偶然ですね。実は私もデートなんです。ちなみに、お相手は？」
「それは――」
『プロデューサー（さん）（兄ちゃん）（ハニーなの！）！』
揃っていた。
って、あれ？
「って、どういうことなのよ！」
まず叫んだのは伊織ちゃんだ。
「ははーん」
「兄ちゃんも隅に置けないなー」
勘付いたような、亜美と真美。
『意外に兄ちゃんもすけべよのぅ』
と、亜美と真美。
「……最低」
千早ちゃんが呟く。
「落ち着いて、皆、きっと何かプロデューサーさんにも事情があったあずだよ」
と、私。
「あれを見てなの！」
美希は指さす。
「プロデューサーさんと、雪歩ちゃん」と、私。
「……なにやら裏がありそうですね」
と四条さん。

「とりあえず、後をつけてみましょう。きっと、あの二人には何かあるに違いないわ！」
『うん』
伊織の言葉に、皆、頷く。

「……あの、プロデューサー、今日は一日よろしくお願いします」
「ああ……こちらこそ、よろしく」
俺の横を歩く雪歩は、どことなく緊張した様子だった。そういう俺も緊張してるんだが。ははっ。
ともかく、今日は雪歩もいつも以上におしゃれをしてきているみたいだし、期待に答えられるようにしないと。
――そういえば。
「雪歩は、どこか行きたいとことかあるのか？」
他のアイドル達には聞いた事だが、肝心の雪歩に聞いていなかったことに気づく。
「わ、私ですか？」
「ああ。どこでもいいんだぞ。っていっても、そんなにこっちも予算があるわけじゃないんだけどな」
「私は別に……その、プロデューサーに任せます」
「そうか……だったら」
皆から聞いたデートプランを実戦する事にした。
「雪歩」
「はい？」
「今日はとにかく、恐怖症を治すとか、そういう目的は忘れて、純粋に楽しむことを考えよう。よし、今日は一日思いっきり遊ぼう！」
「はい！」
雪歩は笑顔で答えた。
「ここは、遊園地ですか？」

「ああ。嫌いだったか？」
「いえ、そんな事はありません！」
俺たちがまず向かったのは遊園地だ。とはいえ、市街地にある、ちょっとしたアミューズメント施設みたいなものだ。
「今日は予定が詰まってるし、精一杯遊ぶことにしよう！」
「はい！」

「……ターゲットは、遊園地に入りました」
そんな時、物陰から二人を見ている、怪しい人影が。
「プロフィールによると、ターゲットは犬嫌いという事ですが、けしかけますか？　はい。わかりました」
怪しい人影は、通話していた携帯電話を切る。そして、片手に繋がれていた、大型の犬。ドーベルマンの手綱を外した。
「行け」
人影の声と共に、ドーベルマンは二人に突進していく。

「き、きゃあああああ！」
突然現れたドーベルマンに対して、雪歩は悲鳴をあげた。
「なんだ！　どうしてこんなところにこんな大型犬が」
俺も慌てていたが、雪歩の前でみっともない姿は見せられない。犬が好きだろうが嫌いだろうが、こんな大型犬が現れたら、誰でも怖がる。素手では普通、人間はドーベルマンに勝てないのだ。
だけど、俺が怖がるわけにはいかなかった。
「安心しろ雪歩。俺が絶対に何とかする」
「……けど、プロデューサー」
俺は雪歩を守るように、前に立つ。

「どうしよう！　あの二人が危ない！」と、春香。かっこ。皆物陰に隠れている。かっことじ。
「自分に任せるさ！」と、響

「けど、ばれちゃうんじゃ」と、春香。
「この変身セットで！」
「万事解決」
と、亜美と真美。どこからか変身道具を出してくる響。すばやく響は別人のように変身する。

「エリザベス！」
突如、俺達の前に、貴婦人みたいな格好をした女性が姿を現した。
「心配したザマスさ！　じゃない、ともかく、こっちにくるザマス、さ！」
現れた貴婦人は、あっという間にドーベルマンを手なづけ、どこかへつれていった。
俺達はぽかーんとするしかなかった。
「……今の、なんとなく、響ちゃんに似ているような気が」
「さあ……気のせいだろう」

「ちっ」
物陰から、怪しい人影は舌打ちをする。
「まあ、いい、次の作戦だ」

次に俺達が向かったのは、千早が言っていたオペラ歌手の公演だった。
「遅いですね……」
しかし、開演のときがきても、コンサートは始まらない。
「はい……」
俺と雪歩は、席に着いてからずっと、待ちぼうけを食らっていた。

「何？　歌手が来ない？」

舞台裏でのことだった。関係者は大慌てをしていた。
「はい！　何でも風邪で休みということで」
「くそ！　一体どうすればいいんだ！」
「今更代役も立てれないし、かといって、コンサートを中止にするわけにも！」

「どうしよう！」その様子を裏で見ていた春香たち。
「こんな時も、この変身セットで！」と、亜美と真美。
「え？　私？」と、千早。

「プロデューサー」
「ん？　……ああ」
一瞬寝かけていた俺を、雪歩が起こす。
「コンサート、始まるみたいです」
『長らくお待たせしました。オペラ歌手ヴァルドゥール・レオンティーナさんのコンサートが始まります』
現れたオペラ歌手。
金髪碧眼だった。
けど、なんとなく千早に似ている気がした。そして、演奏が始まる。
素晴らしい演奏。そして、終わる。あふれんばかりの盛大な拍手が起こった。
「なんとなく、声が千早さんに似てませんか？」
雪歩がそう言っていた。
「ああ……俺もそんな気がしたけど、多分気のせいだろう」

「くそ！」
物陰から、怪しい人影がそうしたうちをしていた。
「まあ、いい、次の作戦だ」

「次はここだ」
「デパートの地下ですね」
次に俺達が来たのは、デパートの地下。略称デパ地下だ。
「ここで、試食品を食べる、というのが今回のデートの目的だ」
「なんだか、随分と安上がりなデートですね」
「おかしいか？」
「いえ、ぜんぜん構わないです」

「次はデパ地下！」と、物陰から見守る春香たち。
「こら、やよい！　なにやってんのよあんた！」と、伊織はしかる。
「だって！　ここすごいんですよ！　いつも行っているスーパーよりも、ずっとおいしいものが試食品で食べられるなんて。うーっ！
目移りしちゃいます！　今度弟達もつれてきてあげなきゃ！」
「あっ！　危ない！　あれを見てください！」
真は指を指す。

「きゃあああ！」
悲鳴をあげる雪歩。
俺達の目の前に迫ってくるのは、猛烈な速度で迫ってくるショッピングカートだった。中は重そうな商品でいっぱい。自転車ほどの速度で迫ってくるそれは、立派な凶器だった。
「雪歩」
俺は雪歩を庇うように、前に立つ。
「とぅ！」
突如現れた、フリフリドレスを着た人の蹴りによって、ショッピングカートは横に倒れる。
「その、失礼しました！」
そして、去っていく。
「今の……真ちゃんじゃないよね」

と、雪歩。
「まさかな、真があんな格好するわけないし」
「真の場合、その格好が変装になっていたの」と、美希。
「ううっ、どうせ僕なんか、僕なんか」と、真。泣いている。
「っていうか、なんで私達隠れてるんだろうね」と、春香。
「二人の逢瀬を覗き見る。あまり感心できることではありません」
と、貴音。

それからのデートは、なんだかドタバタした落着きのないものだった。
ラーメン屋に行けば、激辛ラーメンを食べる事になり、占いの館に行けば、お互いの愛称は最悪。動物園では、動物達に襲われ、ゲームセンターでは、ロースコアの連発だった。
ともかく、ある意味散々なデートだった。
気づけば夕方。お互い疲れたので、公園で一休みをする事にした。

「ごめんな……うまくエスコートできなくて」
「いえ、そんなことありません。プロデューサー。私、今日一日、とっても楽しかったです」
「そうか……ならよかった」
「はい！」
雪歩は笑顔で微笑む。
「それで、少しはなれたか、雪歩？」
「はい……多分、プロデューサーだったら大丈夫だと思います。けど、他の男性だったら、まだ自信がないです」
「そうか……。あまり話したくないかもしれないけど、雪歩は、どうして、その、男性恐怖症になったんだ？」
「……」
「よかったら、話してくれないか？」

雪歩は、いくばくかの沈黙の後、話始めた。
「私が男性恐怖症になったのは――小学生の頃です」
雪歩は、自らの過去を語り始める。
「その頃の私は、今よりずっと臆病で、人見知りで、男の子からよく苛められていたんです。そんな私でも、その時好きな人がいて。ずっと片思いを抱いていました。私とは違う、明るい、クラスでも人気者でした。けど――そんなある日。私が男の子達に苛められていた時――、私の好きな人が、通りがかったんです。助けてくれるかと思った。だけど、実際はそうじゃなかった。助けてはくれなかった。本当は助けてほしかったのに、その人は助けてくれなかった。その時から、私は男の人が怖くなりました。怖くて、怖くて、どうしようもないものになっていました」
「……その時、助けて貰えなかったから、か」
「はい」
「ところで、そろそろ出てきたらどうなんだ？　お前達」
「……プ、プロデューサー」
俺の手に、雪歩がつかまってくる。
数人の男達が現れてくる。
「貴様ら、黒井プロの関係者か！」
「ふっ、気づいていたか、その通り」
代表格と思しき男が喋る。
雪歩の震えが激しい。顔色も顔面蒼白だった。この状況が怖いのもあるが、トラウマと重なっているからだろう。
「安心しろ。雪歩。俺がいる」
「……プロデューサー」
「俺がこいつ等を食い止めてるから、その間に逃げるんだ」
「けど……プロデューサーが」
「さあ、来てみろ。うちのアイドルには指一本触れさせないからな」
「ふっ、威勢だけはいいな、かかれ！」

リーダー格の男が指を鳴らす。
「そこまでだ！」
声が響く。
「ぐほっ！」
とび蹴りをくらった男のうちの一人が、地に伏す。
「菊池真、参上！」
そして、かっこいいポーズを決めるのは、真だった。ちなみに、フリフリのドレスを着ている。
「……真か」
「はい。プロデューサー。それに、皆もいます」
「我が765プロに喧嘩を売ったこと、後悔しても遅いのですよ？」

そういったのは貴音だった。
「そうなんですぅ！　暴力振るったら、おしりペン！　なんですよ！」
と、やよい。
「皆」
雪歩が驚いたように声をあげる。
「くっ」
数で劣るという事を悟ったのか、黒いプロの手下達は撤退していった。
「ふーっ、助かった」
俺はへたれこむ。内心怖かった。所詮はただの強がりだ。俺は決して、喧嘩の強いタイプではない。――けど。
「プロデューサー！」
雪歩が近づいてきた。
「言っただろ、うちのアイドルには指一本触れさせないって」
「はい！」
雪歩は泣きそうな顔をしつつ、笑った。
「だから、安心しろ雪歩。収録の時、何があっても、俺がお前を守

る。だから、お前はアイドルとして、全力で今回のドラマに出演してくれ。何があっても、必ず、俺がお前を守るから」
「はい！」
今度こそ、笑顔で雪歩は笑った。
「と、言っても、今回、俺は何もしてないんだけどな。皆のおかげだ。ありがとう、皆」
「どういたしまして、って言いたいところなんだけど――」
と、伊織。なぜか顔が怒っている。
「私達は可及的速やかに、説明を求めています」
と、貴音。なぜか顔が怒っている。
「一体、どういう事なんですか？　プロデューサー！」
あの春香が怒っている。
「……最低ですプロデューサー。見損ないました」
千早が、怒っている。
「今回ばかりは、私もフォローできそうにありません」
あずささんも怒っていた。
「今回ばかりは、フォローのしようもないさー」
と響。怒っている。
「ねぇねぇー、兄ちゃん」
「亜美と真美を、ゲームセンターに連れてってくれるって言ったのに、一体どういうわけなのさ！」
亜美と真美は怒っている。
「私は、デパ地下の試食品を満喫できたんで、満足ですぅ！　けどプロデューサー、約束破っちゃ、いけないんですよ！」
やよいもやっぱり怒っていた。
「ハニー、美希との約束破るとか、最低なの！」
美希も怒っている。
あれ、どうなってるんだ。どうして、俺がこういう。やばい、黒井プロの手下に囲まれている時により怖い。
「落ち着け皆、話せばわかる。話せば！」

『今回ばかりは――』
『許さないです！（ですぅ！）（の！）（さ！）（よ！）』
「た、助けてくれーーーーー！」
沈み行く太陽。俺の悲鳴だけが、遠くまで響いていった。
なぜか、隣で雪歩が笑っているのが印象的だった。
ともかく、こうして、俺と雪歩のデートは終わった。

エピローグ。

恋に落ちたら、私もまた、変われるのでしょうか。そんなことを萩原雪歩は考えます。
「3、2、1」
カメラマンさんのカウントダウンが始まる。そして、撮影は再開された。
私は走る。そして、捕まえられる。恋愛ドラマの1シーン。私は、そのシーンを無事に撮り終えることができた。
この恋愛ドラマは、恋に落ちた内気な女の子が、恋に落ち、成長し、積極的になっていく、そんな物語。そのヒロインのイメージが、私にピッタリと重なったのだと、監督さんは話していました。そして、そんなヒロインを私も演じてみたいと思うようになりました。
私も、このドラマのヒロインのように、恋をして、成長して、変わっていきたい、そう思えるようになったからです。私も、恋に落ちたら、このドラマのヒロインのように変わっていくことができるのでしょうか。いいえ、きっと、そんな風に変わっていきたい。変わっていってみせます。
もっと恋に積極的になっていきたい。そして、いつか、そんな女の子になれたら、――その時は。
覚悟しててくださいね。プロデューサー。

ＦＩＮ

恋に落ちたら後編（後書き）

読んでくれた方ありがとうございました。
感想など頂けましたら、うれしいです。本当、作者というのはどんな反応でも嬉しいものです。
また機会がありましたら読んで頂けましたら幸いです。

それにしても、やっぱりアイマスは最高だぜ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8915z/

恋に落ちたら

2011年12月29日16時53分発行